東邦学誌
第36巻第２号
2007年12月
研究ノート

東邦学園初代理事長・下出義雄の歩んだ道
―下出文庫の目録作りを機に―

榊　直樹

目　次

はじめに
１．学者への志
２．東邦商業の創立
３．事業拡大と「追い風」
４．日中戦争そして総動員へ
５．大政翼賛会の議員に
６．公職追放と「遺訓」

はじめに

今は改築された東邦高校の旧校舎屋上の倉庫に、今春（2007年）まで段ボール箱に入ったまま眠っていた本学園初代理事長・下出義雄（1890～1958）所有の書籍や雑誌などが、約半世紀ぶりに開封された。この夏、学園内外からの尽力によって整理が始まり、来春を目標に目録作りが進んでいる。既に学園で公開されてきた書籍と併せて「東邦学園下出文庫」と呼ぶこととなった。資料の詳しい分析・研究には各方面のご協力を待たねばならないが、大戦前から戦後間もなくまでに発刊または作成されたものが、約１万4,000点にのぼることが分かった。整理中に研究者らが目を留めた一部だけを見ても、下出が経済人として、大政翼賛会の国会議員としても国策遂行に傾注したことを示す興味深い資料が見つかっている。多くの企業に関わりながら学園経営にも情熱を注いだ下出については、既に『東邦学園五十年史』（1978年）、創立75年誌『真面目の系譜』（1998年）、『東邦学園80年小史』（2003年）に詳しいところであるが、新たな資料なども加えながら、改めて戦前から戦後間もなくまでの様子をたどってみたい。

１．学者への志

私事で恐縮であるが、筆者は下出義雄（以下、下出と略す）の孫に当たる。亡くなる３年ほど前の記憶が残っている。まだ小学校入学前の暑い日、名古屋・栄の自宅（中区南鍛冶屋町二丁目三番地）から大津通りをはさんで向いにあった喫茶店で緑色のソーダ水を飲ませてもらったこと、空襲に遭わず恐らく今般の資料が大量収蔵されていた知多市長浦の別荘まで遊びに行ったこと、覚王山・日泰寺で行われた学園葬の日は大寒直後で、雪混じりの寒風が吹いていたこと―などである。直接の記憶から人物像を語ることはできない。

残された資料で口を揃えて評されているのは、学者の道を歩むほうがふさわしいような読書家だったということである。その一部を紹介したい。

「頗る好学閑を得れば東西の書を猟渉（りょうしょう）して倦むことなく」［１］

「学者型の下出君であるから、実業家としては、珍しい読書家であり、勉強家である。専門の経済史は勿論のこと、新刊といふ新刊は片ッ端から読破して行く。そのために彼は有象無象が襲って来る本宅の訪問者を避けて市内某所に読書勉強のための、借家住ひをしていると言はれる程だ。その読書と該博なる智識は、硬軟そして東西古今に亘って居るが、名古屋に於ける実業家としては実に珍らしいものである。それに『老子』を好んで読む下出君の心境も実業家としては珍らしい」[2]

「その俊敏明晰な頭脳は、故福田徳三博士あたりから学徒として立つことを勧められたといふ位だから相当のものである。この学究的な、そして理想家肌こそ、彼が今日中京財界に在って一風変った存在となっている理由の一つでもある。見方をかえればこれこそ下出君が今日財界人として存在する上に一つの矛盾を感ぜしめ悩みを抱かせらるところであるのだ」[3]

下出は民義の長男として、1890年5月12日に岸和田で生まれた。神戸高等商業を1913年に卒業すると、東京高等商業（現一橋大学）の専攻科に進み、1915年6月まで経済史を学んだ。

東京高商で、下出に学者への道を勧めた福田徳三博士（1874～1930）とは、わが国における経済学の草分け的な存在である。

大正デモクラシーの旗手だった吉野作造（1878～1933）と「黎明会」[1]を組織するなど、民本主義、自由主義の立場で論陣を張り、いち早く福祉国家論も説いた。下出と年齢が近い門下生をみても、現在の天皇の皇太子時代に教育掛を務めた小泉信三・慶應義塾塾長（1888～1966）、戦前に治安維持法違反で教授職を一時追われたこともある大塚金之助・一橋大学名誉教授（1892～1977）、経済政策学の第一人者である赤松要（1896～1974）、さらに中山伊知郎・一橋大学学長（1898～1980）、高島善哉・一橋大学名誉教授（1904－1990）らの名が挙がる。もし、研究室に残っていれば、そうそうたる顔ぶれの一員に名を連ねていたかもしれない。

「ああ天々の大平野……」で始まる東邦高校の校歌は、「作詞・尾崎久彌（きゅうや）、作曲・不詳」のまま歌い継がれているが、メロディは1904年に発表された東京商科大学予科一橋会々歌「長煙遠く棚引きて」（作詞・中田庄三郎、作曲・宮内省雅楽部）とほぼ同じである。「長煙遠く」はハ長調、東邦が変ホ長調でやや高めの音域という違いこそあるものの、4分の2拍子で、歌い始めなどは全く同じ。曲を拝借したことは間違いない。母校への愛着と思い出の深さがしのばれる。

卒業後は、東京市神田区錦町のビルの一室に、学術書出版を主とする「下出書店」を開いた。出資したのは父。城山三郎によると、「学者になりたいという義雄の希望と、実業界に立てたいと思う父民義の願いが、こうした形に妥協したとも見られる。二男の隼吉（じゅんきち）の方は、そのまま学究の道を進ませることとなった。隼吉は日本社会学会の機関誌として、『日本社会雑誌』の発行をくわだてており、まずこれが下出書店から出版された」[4]とされる。

下出書店に関しては、民義がこう語っている。

「資本は私からである。東京帝大文学部に在学した次男隼吉の頼みで、隼吉が関係していた日本社会学会の機関誌発行の経費を出した。ついで明治文化研究会にも援助した。日本社会学会は、東大の社会学教室に籍は置いたが仕事は一切隼吉宅で行った。事務所を隼吉宅に置き、事務員の給料もこちらで払った。

これが動機となり、下出書店を神田に創始して出版もいろいろした。主に社会学会系統のものだが、文芸物や外国文学の翻訳類もあった。

それが大正十二年九月の震災によって、永田町の隼吉宅も下出書店も全焼してしまった」［5］

今回開封した箱の中から下出書店発行の書籍も数冊見つかった。その中の新生会叢書第11編として出版された『絶對と相對』は、九州帝国大学教授の桑木彧雄理学博士の著書である。桑木は1899年に日本人で初めてアインシュタインと会い、後に日本で相対性理論を初めて解説したと言われる物理学者だ。この本が出版された翌年の1922年、アインシュタンは日本を訪れている。

同書の末尾には下出書店の刊行書目が掲載されている。一部を紹介すると、次のようなものが出版されていた。

・桑木彧雄『物理学序論』
・岡邦雄訳『ニウトンからアインスタインまで』
・ゴリキイ原著・内山賢次訳『ゴリキイの見たるトルストイ』
・小泉信三『社会主義の経済理論的批評』
・穂積重遠『国際心のあらはれ』

下出書店のすぐ近くでは、岩波茂雄が古本屋を開き、同じころ学術書を出版し始めていた。「哲学の岩波、社会学の下出」と、比肩される評価も得たという。

非学術分野でも島崎藤村（1872～1943）の『三つの感想』、神近市子（1888～1981）の小説『村の反逆者』『嶋の夫人』などを出している。神近は戦後、女性解放運動に大きな足跡を残すこととなるが、東京日日新聞（現在の毎日新聞）の社会部記者であったこの時期は、社会主義思想に傾き、アナーキズムの影響を受けて大杉意栄と男女関係のもつれから1916年に刃傷事件「日蔭茶屋事件」を起こしたことでも知られる。

こうした品揃えのせいか、経営は思わしくなかった。『時代を創る者』［6］は、皇后美智子さまの祖父・正田貞一郎日清製粉社長ら全国の財界人27人を紹介した中で、下出のことを次のように評している。

「当時日本の学界で、研究を欲する人があっても営業的になりたたないために出版すべくして出来なかった書籍を、全く採算を度外視して出版したもので、一つ橋時代に植え付けられた、研究的な理想の一端を、実践に移した訳で、茲に彼の特異性の一端が表現されたのである。然し此の営業は数年間にして六、七万円の損失を招いた。之は当然な現象である訳だが、予てより之を本意なく眺めていた厳父民義翁は、之を機に彼を無理に名古屋に連れ戻し名古屋紡績の専務にした訳であり、茲に彼は事業界入りの第一歩を印した訳である」

名古屋紡績専務取締役に就いたのは1920年10月。当時の７万円は今の物価に置き換えると、3,700万円（企業物価指数比較）から１億1,900万円（消費者物価指数比較）に相当する。父親にとっては長男への高価な修業代であった。

2．東邦商業の創立

学問をしたいという願望。その断ちがたい気持ちは、東邦商業創立（1933年）へと結実する。創立当初の副校長から校長となった下出は、1939年５月発行の『東邦商業新聞』第100号の座談会で、次のように話している。

まず、「今日でもそうだが、中等学校で新聞を出しているような学校は、全国でも一つもない時代に、東京商大の『一橋新聞』、東京帝大の『帝大新聞』を真似て東邦新聞が生まれた訳です」と自賛。その上で―

「学校創立を思いついたのは古くからで、僕が東京高商専攻科に在学中でした。当時僕たちの先生で、福田博士という方がありまして、大変私がその先生に可愛がられ、卒業後も学校に残るようにいわれたので、少し残っておりまして、

お手伝いをしておりました。いわゆる助手をしていたわけです。

学校の先生という資格を持って学問する事のみ正しい方向ではなくて別の方向で、即ち事業を致しながら勉強したいと思いましたので、翌年名古屋へ帰って参りました。

偶然の機会から、また翌年就職するために東京へ戻りました。しかし自分の気持ちとしては、勉強したいという考えで一杯でした。そんな気持ちでいる所へ、当時中京法律学校を世話していた方で横山金五郎氏の意に従って、大正十一年春に発起して、翌年三月許可が来ました。そんなわけで、中京法律学校を借りて開校致しました」

民義も「東邦商業学校は、長男義雄と二人の考へによって生じた。私も義雄も、永年いろいろな会社に関係してみて、まじめに実直に働く人材の養成が急務であると痛感したからである。学校の綱領として『真面目』を選んだのもそのためである」［5］と振り返っている。

父子はこのように述懐している。ただ、経緯を額面通りに受け取っていいものか。『財人研究　此の人を見よ』にはこんな裏話も紹介されている。

「(名古屋紡績の専務就任は) 下出君が欲気張る財界に足を踏み入れた第一歩なんである。ところが、紡績の経営なんて云ふことは只の素人に出来る業ではない。原綿の買付が相場であり、出来た綿糸の売付が又相場であるからだ。実業家下出義雄君のスタートに於ける痛ましい失敗の歴史には、この意味で大いに同情に値するものがある。

そこで、所詮は学者肌、理想家タイプの抜けきらない下出君だ。恐る恐る『お父さん、僕に学校をやらして下さい。これなら屹度自信がありますから』と東邦商業の経営を始めたわけであった。

当時民義翁は、ある人に『まあいいさ極道息子が芸者買ひして遣ふよりは、少しは上等だよ。学校なら俺が死んでも形だけでも残っている』と告白したさうであるが、その芸者買ひするよりと諦めてやらせた学校の経営が、適材適所とでも云ふか、エラー続きで腐っていた下出君に、軽い当りのテキサスとなって、一塁に生きたという次第であった」

父親の謙遜も含まれていようが、このエピソードからも企業経営より学校づくりに情熱と自信を持っていたことが伝わってくる。下出は1934年、校長を務めてきた元名古屋市長の大喜多寅之助に代わって副校長から昇格した。校長就任の訓示で、東邦の「四大特異性」として「真面目」「独立独歩」「規律の厳格さ」「情愛ある学校」を強調している。自らの夢がかなうと積極的に学園運営に携わり、才を発揮した様子が書かれている。

「この東邦商業は、学校の設計から、教師の雇入れ、生徒募集に至るまで、下出君の合理的経営に叶って居るといふが、尤よりその教育方針には、下出君の理想的な色彩が多分に織り込まれてゐて、珠算バチバチ、簿記商法の画一的な詰め込み主義とは大いに異って居るという人間教育、そこに下出君らしい基調と抱負が置かれて居るのだ」［7］と。

3．事業拡大と「追い風」

企業と学園の経営。それだけにとどまらず、活躍の範囲は次第に拡大していった。1936年の時点で少なくとも次の肩書きを持っていた。

［校長］東邦商業学校
［理事長］名古屋株式取引所、名古屋少年団
［副会長］名古屋体育協会
［社長］大同電気製鋼所、木曽川電力、築地興業、久保田製作所、大日本セロファン、鈴木ヴァヰオリン、八重垣劇場

［取締役］名古屋紡績、名古屋鉄道、矢作水力、豊国セメント、東海電極、知多鉄道、八勝倶楽部

［監査役］愛知県農工銀行、名岐自動車道、名古屋観光ホテル、名古屋ホテル、新名古屋ホテル

［代表社員］合資会社愛知石炭商会

このほか名古屋商工会議所の庶務部長の任にもあった。

『中部財界人物我観』の筆者、高島耕二は「無理にやらしてくれと頼んだわけではない。世の重役病患者に一つや二つ分けてやってもよい位多数の重役の肩書を持っている。中京財界の代表的一人であることに誰しも異論はあるまい」と評している。また八重垣劇場のことを取り上げ、「彼の進んだ鑑賞眼を直ちに名古屋の様なレベルの低い観客に当て嵌め、高級映画の専門封切場の目的で設立した。初めは世評通り成功しなかった。これといふのも彼の理想を直ぐ事業に実現させようとした結果で『斯ふしたものだ』という現実を是認する前に『斯くあるべきだ』といふところから出発したからだ」と、その姿勢を評価している。

だがその多くは、下出が一から切り拓いたものとは言いがたい。「ここ数年間の活躍といふものはまことに素晴らしかった。兎角引っ込み思案の財界の若手連の中にあって彼は珍らしく積極的に思い切り働いた。名古屋株式取引所を本拠に、八方に事業を拡大して『正に当り屋』の名にそむかない」と高島は持ち上げている。同時に「然し如何に下出君が縦横の活躍をしたからといって正直なところ、その全部が下出君の実力、手腕によったということは出来ない」「正に『インフレ』の波に乗った第一人者であると折紙が付けられるのだらう。然しこれとて彼の背後に光る父民義譲りの富の力と、翁によって永年培れた財界に対するニラミがあることを忘れてはならぬ」と冷静に分析している。

戦火も、下出の事業経営には相当な追い風となった。「満州国」建国が宣せられた1932年に出版された人物評伝［8］は、次のように看破している。

「真面目で、責任感の強い下出君は、それにも拘はらず熱心に経営の衝に当る中、図らずも突発した満州事変の為め、軍需工業は俄然として活況を帯び、これまで腐り切って居た（大同）電気製鋼は、飛行機鋼材を初め其他の入注殺到し、従来の職工及び工場設備等にては製産に不足を告ぐる為め、職工の急募、東築地工場の拡張など、一般財界の沈衰、不況を余所に非常の活況を呈し、業績は従前と打って変った好調を呈したのは、好運と云えば好運に相違ないが、此間に処して、機宜の処置を執った下出君の功績による所が多いのである」

こうして企業経営が順調に進む中で、下出は1937年、日本経済聯盟会が派遣した欧米訪問経済使節団の一員として、米国と欧州を視察に回った。経済聯盟会は当時国内で最も影響力のあった経済団体で、戦後は経済団体連合会に改組され、現在の日本経済団体連合会に至っている。国際商業会議所での活動、米国や英国との通商問題、財政・税制、産業統制問題などの国内産業経済政策にかかわる活動など、資本側を代表して活動していた。使節団のメンバーは「有力なる実業的使節団たらしめんとの方針の下に我国産業貿易金融界に於ける代表的実業家を主要産業都市より選んだ」（『使節団報告書』）。団長の大倉組副頭取の門野重九郎ほか団員９人など総勢29人。団員の中には戦後、経団連会長を務めた石坂泰三第一生命保険専務取締役も入っていた。この報告書は今回の整理作業で、複数の残部が見つかった。英文の報告書も作成されており、視察内容を経済聯盟会が国の内外に広く伝えようとしたことがうかがえる。

1937年４月28日に横浜港から龍田丸で出発。ハワイを経由してサンフランシスコから米国に入り、ニューヨークで米国と通商問題を協議したほか、ルーズベルト大統領にも会った。航空機産業やIBM、綿花の生産地なども視察した。ノルマンディ号で欧州に渡り、ヒットラーが列席してベルリンで催された国際商業会議所の総会に参加した。この総会では多くの分科会が開かれ、下出は工業所有権保護問題委員会の委員長を務めた。７月には英国で日英通商協議を行ったほか、バッキンガム宮殿で国王ジョージ６世に拝謁した。「国賓並みの厚遇」と歓迎を受けながら友好を深め、経済摩擦の緩和に努めたが、訪英中の７月７日、中国で盧溝橋事件[2)]が勃発する。

下出は外国を回って、さまざまな感想を持ったようだ。見聞した印象を新愛知新聞に「欧米漫談」と題し、17回にわたって寄稿している。

ハワイで、三千人が通う中学校を視察した時の感想。「余りに頭脳を働かし過ぎて、発達の途上にある青年を萎縮せしめるといふことから所謂自由な伸々した教育をするといふ方針のやうに聞いて、これは我々日本人のやうに勤勉努力あらゆる困難に打ち克ってゆく力、また世界に一日も遅れまじと、汲々としてをる日本人から見ますと、我国の範とするのはどうかと思った」と首をひねっている。

アメリカで目の当たりにした大規模なストライキについては、「日本の実業家が一般社会の情勢に鑑みて資本家もしくは使用者側として被使用者側との協調に眼覚めてをるか、少なくとも相当の考慮を払ってをるのに比較して、むしろ実際の認識を欠いてをるのではないか。徒らに困った困ったの怨嗟の声と共に『日本の方にも同じ様にストライキが頻発するか』という質問を殆ど話題の度に発し、我国産業界の状況に照らし合せて羨ましがって居りました」と、やや呆れた様子である。

ロサンゼルスで航空機ダグラスの製造工場を見学した際は、「二十一人乗のやうな大型の飛行機が同時に数十台も組立中である有様を眺めますと、その盛んなることは羨望に堪えません」と驚嘆する一方で、「時局に鑑みてかかる大型飛行機は容易に大型爆撃機に変り得るといふことを想到せば一層我国の飛行機工業の発達に官民一致努力せねばならぬと存じます」と、軍需産業に従事する立場からの決意も明かしている。

また、サンフランシスコで二千万人が訪れる博覧会が翌年に開かれると聞き、「パリで開催の国際文化博覧会を見物しましたが、悲しい哉、日本の出品館は欧州の名もない小国にも劣るやうな貧弱なもので、日本文化の宣揚どころか……。ややもすれば米国における支那の宣伝に圧倒されてをる日本が、かかる貧弱極まる施設をすることは大いに考慮を要する」と、日本の国威を損ないかねないことを懸念している。

４．日中戦争そして総動員へ

大陸で戦火が拡大していく中で、日本と国際情勢の行方をどう捉えていたのか。今回見つかった資料のうちから「下出義雄氏に時局談を訊く」［９］というインタビューが見つかった。盧溝橋事件から１年後の1938年７月７日に行われた。インタビューは下出の見方や経営者としての心構えがうかがえる内容である。この年の３月、国家総動員法が近衛内閣の下で制定されていた。衆議院では社会大衆党の西尾末広（戦後に民社党委員長）までが演説の中で「ヒットラーの如く、ムッソリーニの如く、あるいはスターリンの如く大胆に進むべき」と賛成していた。

まず注目されるのは、日中間で早晩こうした状況に至ると見ていたことだ。

「昨年の今日は倫敦(ロンドン)にいた。経済使節団の一行とイーデン前外相と会見した日だった。その翌日の外国電報で盧溝橋事件を知った訳だが、当時の英国の新聞は、まだ親日的だった。日本の声明も不拡大主義であったし、どの新聞を見ても、局部的解決に一縷の曙光を希望している様だった。そんな状態だったので我々の一行は倫敦では各方面から非常な歓待を受け、英国皇帝陛下からの謁見を賜った程でした。当時の世論は漸次日英再接近の気分も見えたし、局部的解決するものと一般は思っていた様でしたが、僕は秘かに、これを重大に考えていたのです」

「支那の抗日運動を歴史的に見て来ているからです。小学生の教科書にまで抗日精神を織り込んだ抗日意識を扇動して居る。日本に対しては、実に永年に亘って、日貨排斥その他の根強い抗日運動を続けているので、一度日支が干戈(かんか)を交へれば、行く処まで行かざれば納まるものではない事を、日本としても自覚せねばならぬからです。僕は支那には度々行っています。そして支那の歴史を殊に民族問題を研究して来た」

「大正〇年、僕が学校を出た時、朝鮮から満州を視察しましたが、当時は張作霖が満州を統治していた時で、張作霖の要人達と共に親しく逢って語って来ました。二度目が大正十四年五月三十日で上海騒擾事件[3]の直後です」

「日本の経済界でも非常に注目する処となり、商業会議所で中華民国派遣団が組織され、名古屋から僕が選ばれた。現実の支那は大した体験でもないが、歴史的な支那は書物を通して読めるから多少は知っているつもりです。僕は自分自身で、ピンと頭に来た。愈よ来るべきものが来たぞ！　日本は愈よ東洋永遠の和平のために遂に起ったか、然し偉大な事業だ。全力を挙げて闘い、国力と国運を賭して闘う世紀の大事業だ。此の日支の正面衝突の運命は数年、十数年の前から、刻々と醸成されていた。日本の寛容の態度を見縊った蒋政権は、排日抗日意識を小、中学生の教科書にまで織り込み、更に部分的には日貨排斥、日本人紡績工場内の赤化運動、あらゆる手段と方法を以って挑戦している蒋政権とは何れ、一度は正面衝突せねばならぬ宿命にあったのです。そしてこの際正義日本の実力を充分に行使して、暴支を徹底的に膺懲(ようちょう)してこそ後、日支は相結んで東洋永遠の和平が此処に確立するのです」

要因は国民を反日へと導いた蒋介石の側にあり、日本の行動には正義があるという認識である。ただ、戦況は容易でなく、世代をまたぐような長期戦すら覚悟すべきだとも強調している。

「支那もサル者、決して見縊ってはならぬよ。此処に長期抗戦の覚悟と国民的決意が必要です。神功皇后の三韓征伐、豊太公の朝鮮征伐に勝る偉大なる大事業を現実に遂行しつつある。何にもかも犠牲にすべき時である。此の世紀の偉大なる大事業遂行のためには、只一つ国策の線に沿って、国力と国運に協力すべき時であると僕は信じるものである」

「本当の戦いはこれからですよ。武力戦が今漸くその緒についたまでで、経済戦、それから思想戦お互いの持久戦、生活力精神力あげての綜合された国運と国力を賭しての戦ひが近代戦の特長である。今回の支那事変の特徴は蒋政権の完全なる壊滅とその後に起つべき新政権によって東洋永遠の和平を目的とする日支親善が最後の目標であるから、五年、十年三十年の長期戦を覚悟せねばならぬと思ふのみならず、聖戦の終局の功績は吾々日本人が、二代三代否数代の努力を傾ける可き問題と思ふ」

そして、総動員体制について一層の努力が必要だと力説している。

「率直に言はしむればだね、今日の統制と其方策はまだ遅かりしの感があるね。要するに事変

勃発と共に、此の統制が行はれるべき筈ではなかったか。近衛内閣は日本の戦時体制下の政治的陣容として内外共に絶賛されていると思ひますね。ことに池田成彬大蔵商工大臣によるビシビシたる最近の物資の統制強化は、好むと好まざるとに不拘此の客観的情勢に於いては当然の事なのですから、国民の自覚と相俟って欲を言えば、一日遅きに失するの感がありますね。

国と共に生き国と共に伸びるときであって、個人の欲望を犠牲にして国策の線に沿って生きる時であると思ふ」

「僕の関係している大同製鋼でもね、会社本位の利益から言えば、増資をして生産能力を増設するより、出来る範囲の設備で生産した方が、会社の利益かもしれないが国をあげての戦争時代、作っても作っても尚、必要に迫られている製品を、そのまま見ている訳にはゆかない。資本主義的な考へ方なら、利益を度外視しては事業は成り立たないが、今は、個人の利益や、会社の利益のみを考えて居るべき時でないですよ。ごまかしや場当りの経営でなくして真に国家社会に役立つ事業なら、仮に一時の難局はあっても、神は見捨てない」。「其処が僕の考え方だ、悧巧な方法は何もない。熱意と誠意に優るものはない」

肉親の思い出によると下出は、口数の決して多くないタイプだったというが、このインタビューでは多弁に聞こえる。

5．大政翼賛会の議員に

政界にも関わることとなる。太平洋戦争に突入した翌年の1942年４月、第21回衆議院総選挙で、下出は大政翼賛会の推薦を受けて愛知第１区（定数５）から立候補し、当選した。父民義は衆議院議員の後、多額納税者による貴族院議員を1928年９月から務めており、親子で国会議員となった。

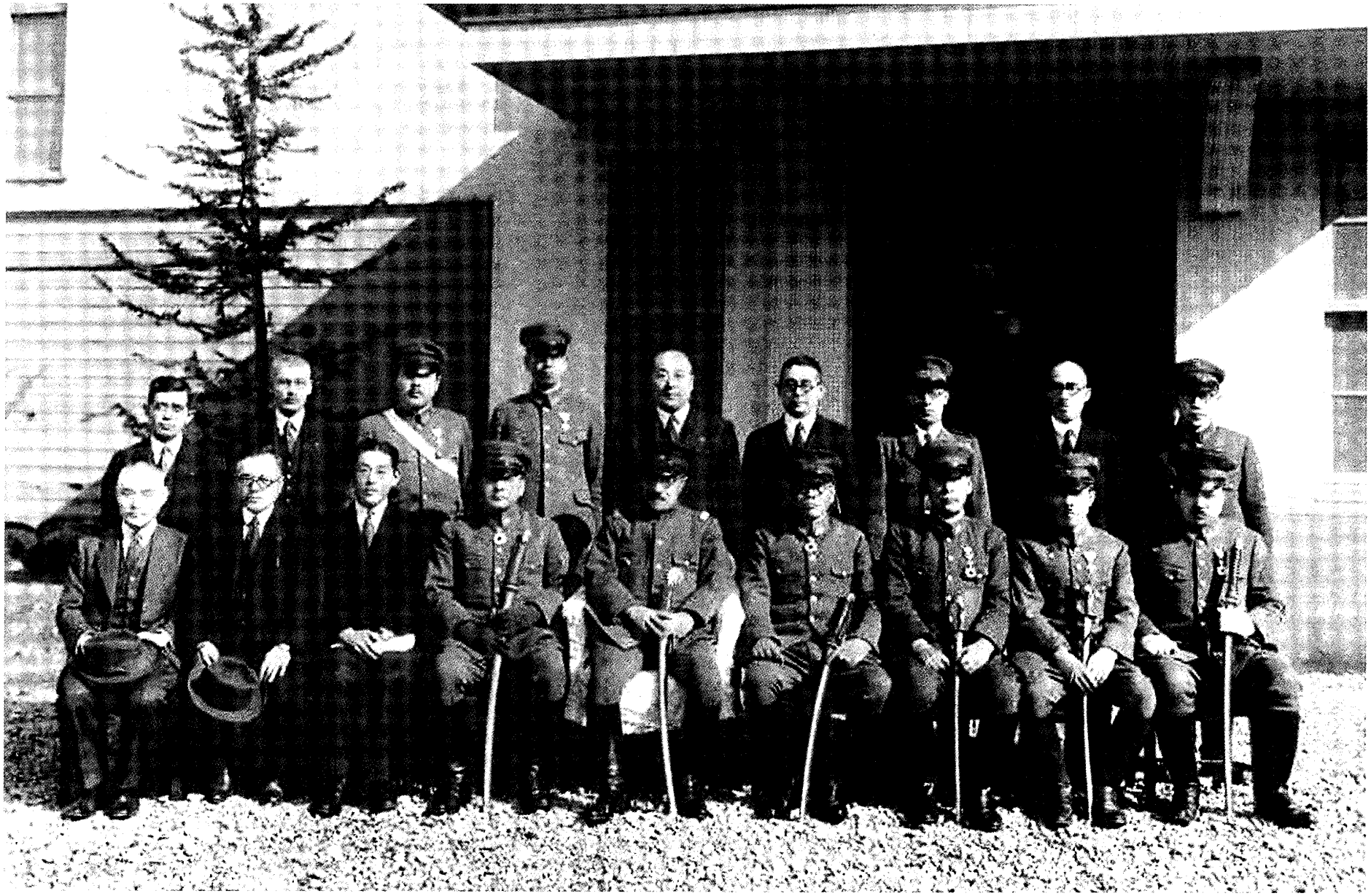
しかし、進んでこの道に入ったわけではなかったようだ。妻の下出サダ（1893～1996）が『東邦学園50年史』で次のように回顧している。

「学者になるつもりでしたし、私との結婚の話が起きたときもそんなふうに聞いておりました。タイプとして実業家肌ではなかったですね。それに政治はとてもきらいでした。のちに翼賛会から衆議院議員になったのも、周囲から無理矢理に押しつけられたもので、自発的ではございませんでした」

最も身近にいたのだから、その通りだったのであろう。

だが下出は、1940年10月に結成された大政翼賛会に、中央協力議員と愛知県支部常務委員の肩書きで名を連ねていた。東条英機首相は選挙直前の２月18日、「衆議院議員総選挙対策翼賛選挙貫徹運動基本要綱」を閣議決定し、政府自ら翼賛候補者を後押しした。要綱は運動の目標を「大東亜戦争ノ完遂ヲ目標トシテ清新強力ナル翼賛議会ノ確立ヲ期スル為衆議院議員総選挙ノ施行セラルルニ際シ一大挙国的国民運動ヲ展開シ以テ重大時局ニ対処スベキ翼賛選挙ノ実現ヲ期セントス」とうたった。それに呼応して各地の有力者が相次いで出馬し、下出も立候補した。

この選挙は本来、４年の任期満了に達した1941年に行われるところであったが、戦時下を理由とした「衆議院議員任期延長ニ関スル法律」で１年延長され、さらに米英と交戦に入ったことで再延長論まで起きた。選挙は、真珠湾攻撃に始まる電撃作戦が奏功して戦況がまだ日本優勢だった時期に当たり、投票率は83.2%と1925年の普通選挙制度以降で最も高くなった。大政翼賛会に推されない候補者は強い干渉を受けた一方、翼賛会候補者には官民こぞっての支援が行われた結果、定数466のうち８割を超す381人の翼賛会推薦候補者が当選した。



東條英機（前列中央）と並ぶ下出義雄（前列左から３人目）。時期、場所とも不明だが、写真の台紙に名古屋市中区の「三國庄次郎撮影場」の名があり、名古屋で写されたとみられる。筆者が母（下出の長女）の遺品から見つけた

下出文庫の資料から、行政区ごとに整理された有権者名簿が見つかった。当時の有権者は25歳以上の男子で、その住所と氏名が記されている。活字印刷であり、相当な部数が作成されたと考えられる。現在でも有権者名を選挙管理委員会では閲覧できるが、個人情報保護のため公刊など有り得ない。時代の違いを感じさせる。

国会議員となって、どんな役割を果たしたのか。議事録を検索してみると、「下出義雄」の名は、第80回帝国議会の1942年５月27日から一期を務めた間に58件見つかる。衆議院本会議での議席の指定、委員会の所属委員として、下出の名が記録されている。予算委員会のほか、国民貯蓄組合法中改正法律案外一件委員会、所得税法外二十九法律中改正法律案委員会、産業設備営団法中改正法律案外一件委員会などに所属したことが分かる。敗戦後の1945年12月には、労働組合法案委員会の委員を務めたとある。

この間、発言した記録は一つもない。なぜか。かつて新聞記者として政界を取材した筆者は、国会内では与党の「数合わせの一員」だったとみる。時代が下って自民・社会両党による55年体制が続いたころ、自民党所属で、しかも当選１、２回の議員は、委員会に欠かさず出席する役目を負うが質疑にはほとんど立たないものだった。政府と一体の与党は政府の姿勢を表立って質す必要がない。当選回数が政治家の序列と評価だという空気も支配していた。圧倒的多数を占める翼賛会議員の中に在籍し、まして戦時下、新人・下出議員が先輩を差し置いて発言する機会がなかったのは当然であったろう。

しかしこれは、国会の議事録に表われた範囲である。下出文庫の整理中に、国会外ではあるが議員として発言していたことを示す資料が見つかった。「昭和十七年九月　第四回対満事務局勤務内閣委員懇談会議議事要録　対満事務局」と題する資料で、ざら紙にタイプ打ちした印刷物である。27㌻の議事録は紙のこよりで綴じられ、表紙に「極秘」の赤い印が押されている。

対満事務局総裁室で９月３日に開かれ、内閣委員として下出のほか河合良成、出光佐三ら７人が出席した。事務局側からは次長・竹内新平、総務部長・田中義男、海軍中佐・林孝善、陸軍中佐・小島純勝ら８人の名が並ぶ。満州など対外政策をつかさどる複数の組織が大東亜省に統合されることになり、「之ガ為本内閣委員会モ対満事務局トシテノ委員会トシテハ最後ノ集会トナルモノト思料セラル」と竹内次長が発言、議事が始まっている。

満州における食糧などのコストが問題に取り上げられ、下出は「コストニ付イテハ内地モ同様ナルベシ、生産費安価ナレバ可ナルガコストニ依リテ生産ヲ左右スルハ不可ナルベシ。大東亜共栄圏ヲ外圏、内圏と区別スルトキ日満支ハ其ノ内圏に当リ就中満州ハ国防上特に緊密ニセザルベカラズ、日満一体化ヲ更ニ強化スル要アルベシ。日本ハ日本ニ必要トナル○、電力、石炭ヲ満州ニ求メズシテ他ノ何処ニ求メルコトヲ得ンヤ」と、満州が日本にとって死活的な存在であることを強調している。また、労賃の値上がりが価格上昇を招いている点について「物資ノ価格安定ヲ図ル為ニ経済平衡資金制度ヲ運用シテハ如何」と提案している。

無条件降伏―。半月後の1945年９月１日に召集された衆院本会議。席次番号の指定記録を見ると、下出の隣には、29年後に総理大臣に指名される三木武夫が座っていたようである。翼賛会推薦で議員になった下出と、非推薦で当選してきた三木。敗戦によって旧秩序が崩れ始めたとき、この二人はどんな気持ちで隣り合ったのだろうか。下出の名は、第89回の1945年12月18日を最後に、以後登場しない。

6．公職追放と「遺訓」

1946年２月から順次発せられた公職追放令によって、下出は大同製鋼社長などの座を辞職し、国会議員の地盤も東邦商業の卒業生で社長秘書を務めていた江崎真澄（1915～1996）に託した。追放令は戦争犯罪人や戦争協力者、大政翼賛会、護国同志会の関係者に加え、有力企業幹部、マスコミ人などにも広げられていた。

自民党衆議院議員として防衛庁長官、通産大臣、総務庁長官、自民党総務会長など要職を歴任した江崎は、下出の思い出と恩義に対して、こう書き残している［10］。

「昭和十六年の翼賛選挙に下出先生が立候補することになった。私は初めて応援演説を経験する。二十代のなかばだった。私のようなものに者に眼をかけて勉強させてくださり、病中のめんどうから、学園へ引きたててくれた恩人であることを精一杯話した。マイクの無い時代、五、六日もたつと演説者のノドがかれて声が出なくなる。しかし、私だけは、お経でノドが鍛えられており、平気であった。御利益とはこういうものか、体が治るばかりでなく、恩人のためにヘタな演説もできるのだ、と感慨深いものがあった。このときに、私の政治家としての声が形成されたのである」

「下出先生が当選すると同時に、私は先生の会社である大同特殊鋼の社長専務秘書になった。……秘書役のまま終戦をむかえる。GHQの命令により、下出先生は公職を追放されることになった。翼賛議員であり、資本金一億円以上の会社社長であったからである。戦争の焼跡が生々しい昭和二十一年四月十日、戦後初の選挙がおこなわれた。当時、私は三十二歳（満三十歳）、愛知県の立候補者が六十数人にものぼるほど混迷していた。なかでも私は最年少であったし、会社の関係者を含め、随分、驚きをかったものだ。『君は秘書だったし、私との関係は皆知っているからガンバリなさい』。先生は、こう言葉をかけてくださり、父・民義氏（多額納税者として貴族院議員）から、鳩山一郎先生の名刺と紹介状をもらってくださった。これが縁で、私は進歩党から立候補することになったのである」

「当選後、先生のお宅へ訪問すると、『ウソを言わないという信条を通すのは、大変なことだ。政治家は、ウソも方便というが、これを読んでおきたまえ、祝いだ』と、信州・松代藩で藩政改革をおこなった勘定奉行恩田木工（おんだもく）の書いた『日暮硯（ひぐらしすずり）』をくださり、一人立ちを祝ってくださった。座右の書である」

恩田木工（1717～1762）は松代藩の家老の子に生まれた。30歳で家老となり、窮乏と領地の荒廃を抱えた藩政の改革を託された。その顛末を記録したのが『日暮硯』である。実際の改革は容易に進まず、脚色されたエピソードもあるようだが、現代まで読み継がれるだけの教訓や心構えが綴られているのであろう。

その中の一つ。「妻子・家来共、残らず召し呼び、此度の役儀につき、女房には暇を遣し候間、親元へ立戻るべく候。子供は勘当し候間……」［11］。こう申し渡したのは、厳しい改革を断行するのに当たり、「飯と汁より外は、香のものにても給べ申すまじき合点にて候。さて又、衣服も木綿と思ひ……」［10，p30］と、自ら食事や衣服などで極限の質素・倹約に努めなければならない。ただ家族はそうはいかない。うそをついて食べたり着たりするだろうが、それでは範を示せない、だから離縁するのだ―と。

時代が激動し、価値基準がことごとく見直されようとしたときである。下出は恐らく「真面目」を掲げる学園の校訓を改めて伝えたかったのだと、筆者は受け止める。

「下出理事長が、スケジュールをお忘れになる

ことがある」。戦後も名古屋証券取引所理事長の職にあった昭和20年代後半、秘書が変調に気づいた。脳軟化症の始まりだったかもしれない。昭和31年ごろ悪化して歩くのも不自由となり、名古屋の栄から八事に転居した。同じ敷地に住む長女（筆者の母）の家に来ると、おもちゃの積み木をかじってしまったことを思い出す。「オーオー」と漏らしながら、真珠湾攻撃など大戦中の戦闘写真集二冊を繰り返しながめていた姿も忘れられない。

〈注〉

1）黎明会は1918年12月、東京帝大法科大学教授の吉野作造らが中心となって結成された。政治、経済、哲学、心理の各分野の学者やジャーナリストらが集まり、「民本主義」のもと、日本の政治、社会の問題に対して研究し、積極的に主張を展開した。

2）盧溝橋事件は1937年７月７日、北京の西南、盧溝橋の周辺で演習中だった日本軍が、「何者かから」銃撃を受けた事件。ここから日本軍と国民党政府が戦争状態に突入、戦線が拡大して日中戦争に至った。誰が最初に発砲したのか、偶発か故意か、仕組んだものか等々日中双方で諸説があり、発端の真相は不明のままである。

3）1925年２月、日本紡績の工場内で起きた争議をきっかけに、日本人紡績会社６社に広がり、ストライキをした職工は３万1,300人にのぼった。多数の死者もでた。下出は事件についてインタビューの「背後には急進的な支那学生が排外思想を煽り、労働者と農民に向かって『帝国主義者と軍閥を敵として闘え』と指導したので、表面の労働争議が赤化的色彩を帯びていたのと、戦闘的であったので、罷業団と官憲の衝突は相当の死亡者すら出した」と語っている。

引用文献

［１］『中京名鑑』1932年、252ページ。

［２］『財人研究　此の人を見よ』協同出版社、1936年２月、284ページ。

［３］『中部財界人物我観』蓬莱書房、1937年２月、88～89ページ。

［４］城山三郎『創意に生きる　中京財界史』文春文庫、1994年、241ページ。同書は、20代の研究者だった城山が、1955年５月から11月まで中部経済新聞の一面に連載したもの。

［５］東邦学園50年史別冊、尾崎久彌編『下出民義自伝』1978年５月、41～42ページ。自伝は尾崎が1941年から３年間に計10回ほど行った民義からの聞き書きをまとめたもの。学園創立50周年を機に刊行された。

［６］『時代を創る者』人物評論社、1938年11月、15ページ。

［７］『財人研究　此の人を見よ』271～273ページ。

［８］『中京現代人物評伝』早川文書事務所、1932年9月、306ページ。

［９］『人物展望』人物展望社、1938年７月号。「下出義雄氏に時局談を訊く」、聞き手は渡部茂。

［10］『致知』竹井出版、1981年３月号、55ページ。連載「わが人生の師」！・「不運で得た人生の転機――下出義雄先生」

［11］『日暮硯』岩波文庫、27ページ